宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話神湊133番
定価 一年 送料共500円

宗像大社神宝展

来る八月中旬から――東京に於て

本年八月中旬より東京に於て宗像大社社宝展が開催される運びに至った。

これは明治百年を迎えて、世界に冠たる当社沖ノ島神宝並に社宝を展覧し、これら神宝群を通して当社が古代から、国家、皇室との深い御関係、他の神社と其由緒を全く異にする点を都民各位に御理解頂き、同時に当社勅祭並びに御復興に対して暖い御支援を頂きたいとの趣旨によるものである。

この社宝展は、宗像神社復興期成会の尽力により、東京出光興産本社八階、出光美術館が会場に予定されている。

出品する神宝は、現在宝物館に展示している沖ノ島関係、其の他収蔵庫に収納されている未公開の神宝凡そ数百点が含まれる予定である。

社宝類は東郷元帥の扁額を始め軍艦三笠の羅針儀、宗像文書、阿弥陀経石に至るまで全てが網羅されている。

開催期間の八月中旬から九月中旬にかけて東京に於て世界人文学会開会が予定され、文部省、日本人文学会からも宗像大社の古代祭祀遺品を外人学者に拝観させたいとの希望があっている。

本誌既報のように、勅祭社御加列請願については、実に六十年間に及ぶ明治・大正・昭和と、宗像全郡民及び関係者の強い念願があり、就中、昭和十七年戦局激化の際、氏子全般の強い願望により、官民こぞって勅祭御加列の趣意貫徹を神前に誓い、宗像大社復興期成会を結成し、当局にたびたび陳情、遂に勅祭社御昇格が実現されようとする時、歴史上未曾有の敗戦となり、其の実現を見る事が出来なかった。まことに痛恨事と言う外はない。

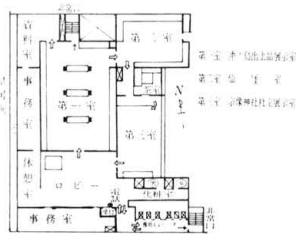
明治百年の意義深い年を迎えるにあたり、是非慶祝の本年中に多年の願望を達成せんと請願運動を続けている。

今回の東京に於ける社宝展も、勅祭社御加列請願運動の一環として、大社では大いに力を入れている。

尚この東京展で神社の全社宝を外部に出陳することは初めての試みであり、特に未公開の沖ノ島出土の国宝類は移動に慎重を要するため、出光美術館の関係者を初め専門の先生方に開催前に御来社願い予備調査や移動の方法などについて協議をして頂く予定である。

この社宝展は筑前宗像大社の秘宝展とも云える大きな催しでありますので宗像会員諸氏を初め御関係の皆様方は御誘い合せの上必ず御来館下さいますよう御願い申し上げます。

(上) 宗像大社宝物館展示室



(下) 出光美術館展示室見取図
展示室　資料室　ロビー
その他　計　2531平米
(765坪)

宗像大社奨学生選定会議開かる

去る二月十七日、昭和四十三年度宗像大社奨学金受給生の選定会議が大社斎館応接室で行なわれた。この奨学金制度は、去る昭和三十四年皇太子殿下御成婚を記念して始められたもので、今回で九回めをむかえる。詮衡基準は郡内六校の中学校より高等学校に進学する者を対象に行なわれ、高校在学期間中支給されるものである。またこの奨学金は返済の義務はない。

当日は郡内六中学校（玄海、大島、津屋崎、城山、福間、中央）の各学校長にお集り願い、当社からは久保宮司、葦津権宮司、宇都宮祢宜、升谷権祢宜が出席し会議が行なわれた。

久保宮司の挨拶に続き、宇都宮祢宜より本年度の支給額（一人年間一万八千円）並に支給人員、（各中学校より二名計十二名）について説明があった。

尚この奨学金の受給生は第一回から本年迄六十六名に達しているが、すでに第一線で活躍している受給生も多く、新年度からはこれらの人々と横の連絡をとり、この育英事業に一層の親密を期するよう具体策が検討された。

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡支社 福岡市吉塚西林寺町 西林寺内
電話㊅九四五六
本社 京都市下京区油小路通六条北入
電話 京都㉟ 六〇六六・一三三四番
七三三七・九七八九番

建国記念祭斎行

祝祭日制定二回目の建国記念祭は全国的寒波の中、去る二月十一日、各地に於いて盛大なる式典が繰り広げられた。日本国建国以来未曾有の敗戦と云う事態に、国は建国の日を廃止して久しかった。永年にわたるその賛否はともあれ、国の起りを祝うと云う事は目出度いものである。

当日宗像神社に於いても、全職員により厳粛なる建国記念の祭儀が本殿に於いて午前十時より、多数参列の中に斎行された。

春まつりの御案内

昔から保存会と云って宗像郡民に親しまれた春まつりが来る三月三十一日より四月二日まで斎行されます。

昔は神社秘蔵の社宝をこの時期に虫干しを行い、氏子の方々に展示を行っていたので保存会という言葉が使われたと思われますが、現在は宝物館が完成しこの行事はなくなりました。しかし祭典と神賑行事は年々盛大に行なわれていますので、皆様御誘い合せの上御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

記

三月三十一日
神賑奉納行事として奉納剣道大会挙行（時間未定）
午後五時、高宮祭並に地主祭午後六時、宵祭り。

四月一日
午前十時、大祭、氏子奉幣並に風俗舞、浦安舞斎行。
午後三時、献茶式。

四月二日
午前十時、大祭。
午前十一時、宗像護国神社春季大祭。

論説　破れ傘

降りはじめた春雨の中、バス停の軒下に立っていると、骨の折れた傘をさしかけて通る一人が、軒下に雨やどりする知人を見つけた。軒下氏は誘われるまゝに、走り出て破れ傘の一人に寄りそった。片袖が濡れるのもいとわず、柄を握り合って互に相手をかばいながら、仲よく田舎道を歩んでゆく。冷い雨音の中に、睦じい談笑と思いやりの好感をあとに残して。

走るバスの座席について、先程の破れ傘を思う。何の興味も感動もない小さい出来事だが、幸福、慈悲、犠牲、忍耐など知性に発した人間性と、利己、排他、抗争など本能的な人間性との矛盾を考えてみた。

人間は相反する両面を持っている。動物は無心で、その生活に矛盾する両面は存在しないが、人間には無心の境地がないだけに、自己にのみ忠実な心を、肯定しまた否定する矛盾がある。それは又、他人に同情し寛容であれと命ずる心と、自己にのみ忠実であれと誘う心との撞著とも言える。

己れの欲しないことを人に押しつける、自分の好きな考え方を、人にも考えさせる。いづれも無理なことは明白だが、対人間の抗争、大きくは国際関係の破綻は、この矛盾に発している。

今日言われる人間尊重は、物質文明に幻惑されて、物質の道具に偏向しつゝある現状を反省し、人間愛の重さ尊さを知れと言うことである。科学技術の進歩は、高度の物質文明の発達となり、不可能と考えられていた機械化を、可能にしている。物質文明の開発は、なお日進月歩の勢で進展するであろう。

それは人類が、文明の恩恵を十分に受けて、文化的生活に満足することが、幸福と考えているからである。然し人智の発達が、如何に物質文明の開発に成果を挙げても、文化的生活の要求が満たされても、それだけで人間の凡てが幸福になり、真の平和が招来されるとは言えない。人間尊重が叫ばれるのは、人間愛の復帰の覚醒である。愛の忘却こそが、対立斗争の素因であり、物質の偏重こそが、平和の障害であることを、説くものに外ならない。

物質偏重は、他人の幸福を考えなくなる。自分自身のために、寛容になる心は、やがて愛の忘却を意味する。「愛は先ず自己にきびしくあれ」と、先哲が訓えているが、これが人間愛人類愛の出発点である。

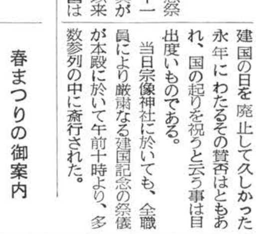
世界の情勢は、東西両陣営の対抗が続き、同陣営の間に於ても、紛争が起っている。それは単にイデオロギーの相違といった抽象的な問題に、その根拠があるとだけでは解されない。中ソ両国にしても、西欧民族の論理的な考え方と、東洋民族の直観的な考え方に、共産主義の取り入れ方式が異っている。要は国民生活を幸福にするという目的は同じでも、国情民族性に応じて、工業の発展がその目的にかなうとするもの、いやこちらは農業に重点を置くというもの、その歩み方が違う。イデオロギーの相違を超えて、平和な国際関係に戻す道は、やはり人間尊重、そのための相互理解と信頼が基調とならなければならない。

わが国内に於ても、政治面、教育面、経済面のいずれにも、対立する二つの主張が、国家社会の順調な発展を大きく阻害している。朝鮮やベトナムのように、同民族が二つに地域的の別政権を樹て、相容れないイデオロギーの旗印の下に流血の激斗を続けている状態に較べると、事情は全く異るが、反対のための反対、妨害のための妨害の傾向まで現れて、暗雲低迷の様相はぬぐい去れない。

その点経済産業の復興は、今日世界の驚異と言われるほど、成果が挙っていても、不満と憎悪は各方面にくすぶり平和な福祉国家への道を困難にしている。中国のある知識人が「今日世界中で日本ほど自由で、言いたいことを憚らず言える国はない。羨しいが然し、現状は日本の将来に必ずしも幸福をもたらす歩み方とは考えない。大戦直後のきびしさを肝に銘じて、祖国愛の旗印の下に同心協力しなければならない」と味わうべき批判を述べている。どこの国民も強く懐いている祖国愛という言葉でさえ、異論が出たり懐疑的反論を聞いたりする奇現象。何と解してよいものか。

対立抗争の社会にも人生にも、幸福は終極に得られない。学生の暴挙、労組の斗争、政界の抗争、いづれも平和への最善の方途を求めての手段なら肯けるが、常にその基底に祖国愛があるべきだ。

阿蒙少言



暦によると三月五日が「啓蟄」とある。少し面倒な文字だが、虫の類がそろ〳〵穴から出てくる頃ともなれば、婦人連の団体行動が目立ってくる。しゃべりたくても炬燵で辛抱していた口角が、春の外気に発散する。沈黙は金なり、とは中年婦人に無用の言葉か、専ら雄弁の銀が、いたる所に罷り通る。「啓蟄」は虫だけの意味ではないようだ◎通勤の途中ガヤガヤとバスに乗り込んだ中老混成の婦人部隊十数名。どこかで開かれる婦人会に出席と見えた。主人の恩給が何万円で家賃がいくらはいる、着物の新調が何枚、犬が三匹猫が五匹、餌代が何百円。調子をあげる精気発剌の老婦人は、この一行の部隊長格。ベトコンの現れない日本の春、しあわせとや言わん◎「この次は是非とも奥さんに、会長を頼みますヨ」と隣席からお世辞が出る。家庭の一切合切、犬猫の餌代まで、銃弾を連発する如くご披露に及んだ老婦人の雄弁は、まさに四周を魅了したかの観。老若を問わず婦人が雄弁になる時は、常に何かを求めている◎「宅では犬猫の餌といっても、決して人間よりも程度を落してはいませんの」と註釈がまた続く。ウソでしょう。

婦人の雄弁家は、政治家が巧みにウソをつくものと、共通点があると判定しておく◎雄弁の素質はあっても、金の沈黙を守っているのは、受験生を持つ教育ママである。婦人会の会議どころではない。スタミナをつける栄養料理や医薬暖房の衛生設備に苦心。「この頃肥えたようだ」と受験生にきけば「十キロふえた」と答える。うまいものを食ってよく眠る。これで難関にパスするなら、甘い天佑神助と言おうか。教育ママは当分銀の雄弁にはなれぬ。（白雲）

第六十一回　宗像大社献詠歌

毎月十五日〆切　詠草到着順

遠賀　長畑　房江
病舎の中動き始めし朝まだき開きし窓より小綬雞きこゆ

久留米　篠田太郎坊
この孫は弱きが故に芹つみに連れ来しと媼が知己のごという

勝浦　永島　計七
賀状整理の中に交じれる孫の出した猿の絵おかしいつまでも見る

津屋崎　永島　文子
神風の玄海灘に明け始むる明治百年の潮寄せ来る元旦

吉田　占部　由久
露台より見下る冬の海荒れて波ほ白く岸壁を打つ

飯塚　萩本　夕照
満人が荒れし手をもて拵へし餃子の味の忘れかねつも

宮田　片山　一
田の中に架橋の杭を打ちをりてトラックの音砂利御す音

宮田　片山　朔子
亡母になし得ざりしことの思わるゝ夜半なり風の鳴るに目覚めて

田熊　鷲頭かつ代
立春を暦の上に知りしより春待つこころなほまさり来る

村山田　吉田佐市郎
おもほえず訪い来し人の誠意（まごころ）のこもりて厚きいたわりに泣く

福間　井原　元彦
花めぐみ寒もゆるみて大屋根の雪すべる音春の足音

香椎　織田　橡雨
（甲歳の感懐）
奮はざるを得ざる御代かも文化さへいよよましらの年となりても

陵厳寺　真鍋　万三
百歳の階段昇りけり九合目まだまだ昇らん元気に最後まで

福間　森　八蔵
稀に見る許斐の山の雪景色立花山を偲ぶ宗像

香椎　桜井　ツ子
ひたすらに泥田植うる貌よベトナムのあした平和の唄希ひ止まず

名残　竹原　圓
としよりの寄る日もありとこの月はたのしみにして柿の肥えする

田熊　小野角次郎
桃の紅茜に染みて夕雲の高さに及びて西空清し

田熊　小野かをる
梅便り聞くだに心清しくも太宰府思ふ詣でし記憶に

戸畑　田中　桂一
投薬の処方する度に祖母が飲ませしせんぶりの苦さ今に忘れず

戸畑　田中ハツセ
目鼻立ち美男に見ゆる大日如来の頭だけが残り一群を圧す

津屋崎　麦野　時雄
見渡せばかすむ海原航く船の夢路の如く影もかすかに

東郷　藤崎　辰子
鉄粉にいたく汚れし作業衣を濯げばあわれ黒雫たる

福間　松尾　豊
病む吾に代りて鶏飼ふ妻の日々産卵ふえ来て楽しと告ぐ

原町　八波　五月
谷深き力丸ダムのその奥は我がふるさとよ友老いて行く

大井　村山　幸生
梅薫る日なたにしばしまどろめは猫もそえねのねいきたてつゝ

福岡　江崎　琴子
うすらひもいつしか溶けて池の面に春の光りの降りそゝぐかも

別府　土性　トヨ
にわかに高くなりたる野菜に百円札は握りしめをり吐息洩れ来て

武丸　立石ろせの
木蓮の枯葉一枚舞ひ上り春の疾風は音たてゝ過ぐ

宗像　中村　幸
若き母と手を取り合ひて走る孫のあとゆく我は忽ちおくれて

宮田　北原　君子
夫逝きて二十数年経ちし今日吾子結納の日取となりぬ

深田　中野　節子
日のぬるむ溜池の土手はとりどりの生活匂ふ寝具干されぬ

大井　吉田　杏子
旅立ちし友気づかひぬしんしんと降る雪音を今宵聞きつゝ

大井　安部　重郎
枯菊の雪戴せたるもあはれなりそこはかとなき花の面影

大井　木原　房子
中天にかゝりて淡し冬の虹春待つ心独りあたゝむ

筑後　井上代利子
珍しき大雪となりこの雪をジャーナリズムは白魔と名づく

田島　白雲　山人
星空を見ればおもほゆ凍る野に果てたる友がくせのまばたき

宗像談話室　サルマネ談義

奥信濃の雪におゝわれた野沢温泉、こゝの野天風呂に数年前から、一群の猿が入湯を始めた。雪の中の温壺に一人の老翁が、毎日つかっていると、ボス猿を先頭に数匹が近づき、最初は傍で見ているだけだったが、ある日ボスが温泉に入ってきた。すると他の猿もボスにならって、心持よさそうにつかっている老翁の傍に、入浴するようになり、今もなお続けているとか。伝説ではない。

人間が湯煙の立つ温泉につかって喜んでいる顔を見た猿が、まさにサルマネを演じたのである。暖かくてよいと感じた一群の猿は、サルマネの域を脱して、堂々入湯客におさまるようになった。

猿の入湯、珍しい風景であろう。伝説発生の一面がうかゞわれるような話だが、現代の事実風景だから、面白いサルマネ。

一僧侶が野猿を手なづけて有名になった高崎山。坊さんの気長な野猿誘導が効果をあげて、人間の食べ物を同じように頂戴する訓練が、自然動物園となり、今では別府を訪う旅客を誘致する大切な観光資源となっている。

猿が何かをまねることから始まったサルマネだが、今では人間社会で他人のつまらぬマネをする意味の言葉となって、概ね芳ばしからぬ内容を持っている。

この頃流行する風邪ならぬ大学生の暴動病、小石とこん棒が武器に使われているが、石を投げて人を傷つける戦法は大学生が元祖ではない。戦国時代の合戦記録によると、死傷者の傷あとが氏名の下に記されている。刀槍や矢のあとは少く、多くは敵の投石による手足の負傷である。

雑兵が刀槍弓矢を誰もが十分に装備していたのではない。絵巻物に見るような立派な甲冑をまとって、降るような矢弾の中に奮戦したのではない。一軍の将領はいざ知らず、名もなき兵卒の多数は、石やこん棒の戦斗であったであろう。徳川家康も幼少の頃、家臣に背おわれて石合戦を指揮したと伝えられている。

戦国乱世の雑兵の戦法や、野盗やくざのこん棒の乱斗をサルマネしたものでもあるまいが、こんな故事は学ばぬがよい。学識技術を究め、人間形成に努めることを本領とする学生が、戦国の雑兵をまねたのでは、最高学府の名が泣くであろう。面白くないサルマネは、多数の迷惑となる。

地方によっては、現代もなお残っているよからぬ因習の一つに、申年の結婚を忌む迷妄がある。申は去るに通ずるとして、十二年に一度は必ずやってくる暦年にケチをつけてきた。これも古い時代に横行した意味のないサルマネで、昔頭の良い人物が、結婚の申入れを断わる口実に窮したか、結婚を延期する得策に利用したか、その辺に起源があるのかも知れない。丙午と共に申年不婚のくだらぬサルマネは、消え去ってほしいものである。

見ざる聞かざる言わざるの三猿主義は、つゝしみ自省を表明して、無用な摩擦を避けるためには良かろう。見れば言いたくなる、聞けば話したくなるのが人情だろうが、特に口数の多い婦人や軽率な軽薄氏が、三猿主義に傾いてくれたら、職場も家庭周辺も、もっと明るく平静になろう。

所詮人間も先人の生活をまねて成長し、次代をつくってゆくのである。子が親の生き方をまね、後進が先進の学術経験をまねることは、当然のことである。然し人間の生き方には、学び得たものに新しく創造が加えられるべきである。大きくは歴史的の伝統でも、その継承した伝統を尊重しつゝ、新しい伝統もまた創造されねばなるまい。それはサルマネではない。

特に秀れた先人の偉業を敬慕し、その業績を究めてこれに倣いたいと、精進するなら結構なマネである。

──狸住庵茶話──

発展する宗像ベットタウン

宗像郡は近年ベットタウンとして脚光を浴び、郡内の至る処で団地造成が盛んである。

福間町では国道三号線沿線の白水峠に福間団地が造成されつつある。

県住宅供給公社によるもので、分譲が主なるもの、木造、或はコンクリートの規格サイズの家屋が整然と建並んでいる。

この団地は、なだらかな丘陵地帯を利用して造成され、許斐岳や四塚連山が望まれる理想的な環境、現在、団地の三分ノ一程度が家屋で埋まっている。予定されている国鉄の複線化に伴い、駅も設けられ、数年の内に数百戸のマンモス団地が予想されている。

一方、郡内で逸早く着工された宗像町赤間の宗像森林都市は、順調に発展し、郡内の代表的団地と目されている。この団地は森林都市（株）の手に依って土地造成から建築まで一切を引受けている。

仝社は、都市計画法に基づく、我が国で最初の民間開発事業として昭和三十八年三月発足した。

この森林都市の場所として宗像町赤間を選定、北九州市と福岡市とを結ぶ中心的要衝として、またカン静で風光明媚、交通の便も良好と、ベットタウンの条件を、全く兼ね備えた地利であるからとのこと。

総面積は一二〇万坪、約二千六百戸程が建てられる広さで、住宅難の現状を多大に解消できる一大都市となる予定である。現在昭和四十五年度迄は、第一期工事計画が続行されているが、唯今、その約半分である四百戸程が完成、入居、残りの半分も続々申込み中とのことである。

因みに価格は、一万円から様々とのこと。第一期計画完工の年には、国道三号線バイパスが完成する予定でこの度の新社屋には、住人の増加と相いまって、それに必要な関係官庁の出張所が入ることになっている。同時に学校等の設立計画も進められ、県の指導のもとに整然とした都市が出来つつある事は宗像郡にとって、大きな喜こびであり、誇りともなろう。

三月のまつり

一日　月次祭　午前十時

二日　孔大寺神社祭

孔大寺山（四九九米）、当大社の東北にそびえ立つ四ツ塚連山の最高峰、その中腹に鎮座する旧摂社孔大寺神社の春祭、本社より職員が献幣する。

一五日　月次祭　午前十時

一九日　松尾神社祭　午前十一時

──境内末社松尾神社──

北筑（宗像、粕屋、糸島、福岡）の各杜氏組合の主催により、本年の新酒を捧げて感謝祭が行なわれる。この祭は、先に一二月一九日のつくりこみ祈願祭の奉賽（お礼）祭である。ちなみに当大社の御祭神市杵嶋比売命は酒造守護の全国総主宰神にます。

今月の言葉

問う、何をか清浄と謂ふ。

答う、其の品は一に非ず。或は正直を以て清浄と為し、或は一心不乱を以て清浄と為し、或は生を超え死を出づるを以て清浄と為す。

「穢（けが）れ」は「気枯（けがれ）」とも謂う。

神前に進むとき、手を洗い口をすすいで身を清めることは勿論であるが、単に外形を清めるだけではなく、気力を充実し、誠心を尽して内面の清浄に意を致すことこそ肝要である。

八幡宗像会　恒例の初総会

＝景勝の望玄荘で＝

去る二月七日、恒例の八幡宗像会昭和四十三年度初総会が、北九州市小倉区の望玄荘に於て開催された。午后五時、その名の示す通り、眼下に玄洋の景勝を俯瞰する会場に、会員約七十名が参集、当社より久保宮司と職員一名が参列し、定例通り開会した。

先ず、昨年度の本総会に於て新しく就任された岡崎春雄会長より、ユーモアを混えながら「会員相互の親睦を更に深め、本会の一層の発展に尽力したい」旨の挨拶があり、次いで今年還暦を迎えられた会員に長寿を祝して記念品が贈呈された。次いで新入会員の紹介、本年度の会計監査報告と、議事は進行し、最後に来賓代表として久保宮司より「神社は年々順調な発展を遂げ、今年の正月も昨年より更に参拝者の数も増え、御社頭は非常な賑わいをみせて居ります。更に宗像郡民長年の悲願であります勅祭社昇格の請願運動も目下重大なる段階に直面し、明治百年の意義ある此の年に是非その実現を期したいと、関係者一同、一丸となって邁進して居りますので、会員各位の一層の御協力、御鞭撻を御願いしたい」旨の挨拶があって滞りなく閉会した。引続き神社より持参の御神酒を一同戴いてから懇談会に移ったが、宴たけなわになると会場裾の舞台で、会長の豪快な黒田節が披露されて、やんやの喝采を浴び、やがて宵闇迫る頃になると窓外の関門の夜景が素晴らしく、一段の興趣を添えて和気藹藹の中に懇親の宴は続けられていった。

出光興産　長岡社宅竣工祭

このほど出光興産（株）福岡支店の社宅が完成した。

昨年の七月八日に起工式が斎行され、七カ月ぶりの二月九日、目出度く落成式が執り行なわれる運びとなった。

この日は朝からちらちらと小雪が降り、新装なった社宅の前庭に斎場が設けられ、小野庶務課長を始め多数の参列のもとに祭典は厳かに斎行された。

社宅は出光興産長岡社宅と命名された。なだらかな山に囲まれた景勝の地で、市内の騒音から隔絶した清澄な環境。宅地と道路は美事に造成され、又社宅の前方は、公園地が予定されている。

施工は大成建設、敷地四六〇坪、建坪三六〇坪で、鉄筋四階建の三DK、二DKの二種が用意され、十六所帯が入居することになっている。又敷地内には一所帯一戸あての倉庫、更に子供の遊び場などの施設が設けられている。

門司の独身寮「青雲閣」

これより先、北九州市門司区畑田町には、同興産門司支店独身寮が竣工した。名付けて「青雲閣」。同支店が、独身社員の憩の場、研鑽の場として建設したもので、場所も史跡に富んだ関門海峡を眼下に見下す高台に建てられている。

施工は中和建設、鉄筋三階、一階は食堂、娯楽室、図書室、洗濯場二階、三階は居間となっており、各階四室で一室の広さは十二畳、一室四名が起居する。一室四名の部屋割りは、小集団による互譲互助の精神の涵養と相互の研鑽を目的とした由。

最近人材難の折から若人を極度に優遇する似非人間尊重流行の兆しのある折から、格調の高い人間教育にふれた思いがした。

◉住宅難の今日、こうした立派な家族寮の建設は、会社の社是とする人間尊重の具体的あらわれであり、かかる物心両面に亘る社員への温い配慮が、出光興産の驚異的躍進の因となっているのであろう。

社務日誌抄

二月一日　勅祭請願祈願祭斎行
久保宮司以下全職員奉仕
吉武氏子会長外地元惣代参列
RKB毎日放送ヘリコプターにて沖ノ島渡島の連絡を受ける。午後五時より七時まで巫女の料理講座開催。

四日　節分祭斎行
日曜日と祭日の為、家族づれで賑った。

五日　当社定例職員会議開催。
森林都市、永江家地鎮祭、山田権祢宜奉仕す。

六日　宇都宮、楠本両祢宜、佐賀県呼子町、田島神社に出張、

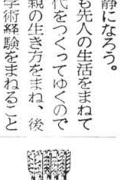
七日　北九州市小倉区望玄荘にて八幡宗像会開催さる。久保宮司養父祢宜出席。

九日　久保宮司、勅祭請願署名の件につき広島県佐伯郡宮島町厳島神社に出向、大野権祢宜随行。
葦津権宮司、末安、城戸権祢宜、出光福岡支店、長岡社宅竣工祭奉仕。

一一日　建国祭斎行。戸畑区丸一運輸株式会社に宗像神社分祀奉斎斎藤、山田権祢宜奉仕。交通安全の御守護をいただき業務に励進したいとの事であった。東京出光会二十名団体参拝す。好天に恵まれ家族づれで賑わい、日の丸の旗をつけた自動車もちらほら見うけられた。

一二日　当社境内地、史跡指定調査の為、文化財保護委員会記念物課、平野邦雄調査官並に福岡県教育委員会松岡主事来社。

一五日　月次祭斎行。宗像町朝町ゴルフ場起工式斎行さる。楠本祢宜、渡辺、末安権祢宜奉仕。



許斐（このみ）の旗風

（其の十四）

葦浦柴舟　作
福田長庵　画

凱旋（一）

許斐三郎康氏の一行は立花城下を過ぎ青柳部落にさしかかった。はるかな東の方に宗像の山々が見える。その中央に丸くふくらんだ山が許斐城だ。

なんと美しい眺めであることよ。戦い終えて郷里を眺めつつ凱旋する兵達の心情は様々であろう。その中でも、いとおしきあさと別れを告げ戦場に向った渡辺小太郎克忠は生ある喜びをしみじみとかみしめていた。

春がすみの中に愛人あさの顔が霧の如く現われる。その姿は天女の如く美しく、女神のほほえみのようにも感ずるのであった。

彼は未だ当年二十三才の若武者でありながら、兵法、戦術の知略を買われ許斐一族の重鎮として、今度の合戦には腕を期待されていたのである。決死の覚悟で無事大任を果した彼の胸に愛人あさの面影が去来するのは当然であろう。

「克忠!!」

首将許斐三郎康氏の声で克忠はふと我に帰った。

「はい」

「宗像大宮司氏範殿に戦果の御報告を致さねば。」

首将の命を受けた克忠は戦いの疲れも、ものともせず早馬に乗り換え一目散に大宮司館へと走りだした。

花鶴川、畦町の部落を一気に駆けぬけ約半とき（一時間）ほどで大宮司館に到着。

館はしんと静まり、合戦の報告を沈痛なおもむきで待ちかまえていた。

「許斐の副将渡辺小太郎克忠殿が早馬で帰還されました。」

大宮司氏範はこの報告を受けるやいなや直ちに克忠を自室に呼びよせた。

「御館様（おやかたさま）只今帰りました。」

大宮司氏範は渡辺小太郎克忠の態度を一見しただけで、合戦は宗像党に利があったことを読み取った。

「克忠、いくさは大勝であったか!!」

「はい、決戦はものの二とき（約四時間）ほどで終りました。尊氏殿は博多にむかわれ、宗像党はいま花鶴川を渡る頃かと思いまする………。」

大宮司は詳細に合戦の報告を受けながら会心の笑みを浮かべていた。

「兵達はあと四とき（八時間）もすれば到着するであろう。今日は各々家に帰らせてゆっくりと養をつけさせるがよい。」

「かしこまりました。」

大宮司氏範の指示を受けた克忠は静かに大宮司室を去った。

報告を終えたと同時に今迄両肩に重くのしかかっていた大役が一気にほぐれ、うつろなまなざしで、よたくと歩きだした。精も魂も尽き果てたとはこのことである。彼は伝令に大宮司からの指示を伝えたと同時に、ぐっすりと深い眠りについてしまった。

いつしか夜も明け許斐一族にとって最良の朝が来た。

許斐一族の決死の働きにより神郡宗像は戦国の世ひとときの安堵を得たのである。このたびの合戦に於ける宗像党の勝利は電光の如く全郡に知れわたった。

早朝より村人達が田島様（宗像大社辺津宮）へ戦勝の御礼参りにつめかけた。境内はいつしか人の波となり、恰も放生会（ほうじょうえ）の大祭のような賑いである。人々は戦士達にと、それぐ手みやげを持ってやって来る。魚鳥、米、酒、卵、など神前には、これらの好意の品々が小山のように積まれていった。

「許斐の大将康氏殿とはどんなお人か、副将渡辺小太郎克忠殿は未だお若い武者殿というが!!」

人々は合戦の立役者である両人を見たいものだと各所でこのような会話を交している。

と、その時、宗像大宮司氏範、次に許斐城主許斐三郎康氏、副将渡辺小太郎克忠、以下重臣達が、静々と一列に並び神前に参進して来た。

この歩武堂々とした姿は実に美しく、神からの使者のように見える。人々は一斉に土下座し、これらの人々を伏し拝んだ。

合戦の聖断を下した大宮司、総大将の大役を果した許斐城主、作戦参謀の克忠、乾坤一擲、勝利をかみしめ神前に進むこれら面々の胸中は、それぞれの立場に於て、感無量な容子であった。

「掛まくも畏き宗像大神の大前にかしこみかしこみも………。」

神域に殷々と響き渡る大宮司の祝詞（のりと）は神々の御庇護の有難さに溢れ、境内を埋め尽す村人達も涙と共に感謝の祈りを捧げるのであった。

（つづく）

多年に亘る

御復興計画進む

＝境域整備・拡張を目指して＝

去る昭和四十二年四月六日、宗像神社勅祭社御昇格の請願運動と並行して境域の復興計画案が作製されたが、この第一次案に基いて早速用地の交渉が進められている。

この案は境内周辺を拡張して、先ず新しい近代的な設備を前面に建設する計画であり、約一三、五〇〇平方米の水田と十二戸の住宅に移転をお願いすることになった。

七月十日に地元の有志並に関係者が参集、神社側の基本構想に対し譲渡の具体的な方法について色々と協議が行なわれた。其の後数回にわたり実行計画の打合せが行なわれ、七月二十三日に第一回の用地所有者との懇談会が開かれるに至った。

その席上、久保宮司がこのたびの御復興について図面を提出し用地所有者の協力を要請したが、大規模な計画の為出席者一同構想の雄大さに、かたずをのんで聴き入っていた。しかし用地所有者としては、先祖代々受け継いできた、屋敷や水田を手放すことは、氏神様のためながら大きな決断を要することであり、当社としてはこれらの方々に対し不利な事態が生じぬよう細心の注意を払い、この事業を進めることを根幹としている。其後数回の用地交渉委員会が開催され九月一日に宗像神社復興期成会より左記の方々に委員の委嘱が行なわれた。

宗像神社氏子会長 吉武儀市郎
〃惣代 大森 武雄
〃 〃 吉武 俊次
〃 〃 井上 倉吉
〃 〃 田中 彦蔵
〃 〃 岩佐次右衛門
〃 〃 深田 好
〃 〃 宮本 六助
〃 〃 中野 武雄
玄海町町会議員 深田 稔
〃 〃 福崎 俊輔
〃 〃 岩佐 勇身
深田区長 井上 兼作
田島区長 吉武 利也
名誉惣代 嶺 太平
（順不同）

以上の委員の方々は地主の方と交渉を続けられ、拡張予定の水田は大体に於て順調な進展を続けている。

また一方に於て、昨年十二月十八日に神社御復興の支援団体として宗像大社協力会が結成され、各部落より理事が選出され、この事業を強力に推進することになった。このようにして御復興の事業は漸次順調に進められているので、年内には計画の基礎となる用地の買収は、ほぼ完了するものと考えられる。

宗像の諸城

城址を訪ねて (五)

蔦（つた）ケ岳城址

この城址は、赤間町陵厳寺に在る蔦ケ岳（現、城山）の頂に、草木の繁った平地として残っている。蔦ケ岳は、東に門司から越える城山峠、南に直方市から猿田峠、又同郡宮田からは赤木峠を越え、田島に至る街道の合流する赤間部落を眼下に見下す四塚連山の最南端の山であり、蔦ケ岳の北には石峠を越え遠賀へ至る小荷駄の通路のある要害地である。

城の構築は古く、第六代大宮司妙忠の時代であることは、片脇城址の項で述べた通りであるが、公家と社家に分離された祭政は、神郡宗像にとっては続き難く、この城も自然その必要性を失い荒廃するに任されていた。

しかし平安末期に於ける源平二氏の勢力移動は、この宗像にも公家中心の政事から、武家中心の政事へと一大転換を与えずにはおかなかった。

ここに宗像大宮司家の戦の根城として白山城が孔大寺山頂に築城（三十六代氏国）され、兵馬の鍛錬をよくし、種々の武勲を挙げ、宗像豪族の名声を鳴り響かせた。

第五十四代大宮司氏俊は、建徳元年（一三七〇）蔦ケ岳城を修築し、この年の応安三年大宮司としてこの城に入っている。

更に第七十九代大宮司氏貞は、昔神武天皇が日向ノ国を発ち、東国征伐に向う折、赤間部落に差し掛ると、神様が騮（かげ）（茶褐色の馬）に乗られて、天皇の目前を行かれたことから、此所を赤馬と名付けた。この故事に因み、またこの蔦ケ岳が要害の地であることからこの頂に築城を計った。時に永禄四年（一五五八）七月であった。

そして明けて五年十一月には築城工事の大半が出来上り、十二月三日の吉日に、これ迄居城としてきた白山城を出て、蔦ケ岳城に入城した。

この時の城は、これ迄の城よりも規模も遥かに大きく、城の東南にあたる宇土に大手門を、又門司口にあたる石丸、鐘崎に至る街道筋の平等寺、遠賀へ至る街道それぞれに城腰城、草場城、赤城の番所が設けられた。

臣下の家は山上から山下に立並び、赤間の町には商家の屋並が続き、その賑わいは恰も京洛の四条、五条の辻とも違わぬ程であったと記している。

× × × ×

勅祭社御昇格 請願運動の経過 (二)

葦津耕次郎 時実 秋穂 大原 義剛 吉田 良春 久恒 貞雄 内野辰次郎 野田 俊作 麻生 太吉 入江 海平 出光萬兵衛 山口恒太郎 貝谷 真孜 中村 清造

頭山 満 安川 一美 桑原 芳樹 河波荒次郎 中野 正剛 伊東 寿 伊豆 凡夫 山崎達之輔 山内確三郎 神崎 勲 大森 達 立石 仲平 石松 啓蔵

有馬 秀雄 庄野金十郎 伊東尾四郎 釜瀬 新平 安部 正也 谷岡 源造 花田 秀吉 梶木 武平 花田順三郎 入江光次郎

昭和三年一月四日

石松 薫 真武民五郎 川島 田造 中村堅太郎 小田岩五郎 伊藤惣太郎 今橋 虎吉

幡掛正木宮司は勅祭社御加列に関する件にて出庁。

昭和三年一月六日
知事副申書を添え宮内大臣、内務大臣宛願書提出

昭和三年一月十一日
宗像地方自治会館に於て奉斎会評議員会開催

昭和三年一月十七日
入江祢宜勅祭に関する件にて福岡市へ出張

昭和三年一月二十五日
幡掛宮司福岡迄勅祭書類持参

× × × ×

勅祭請願

郡内署名集まる

勅祭社御昇格の請願については既報の通り昨年来より強力な推進運動を続けているが、昨年の氏子惣代評議員会に於て、全郡の氏子が一致協力してこの運動に参加する旨決議され早速署名運動が開始された。

宗像郡は古来より神郡と称し、郡民は総て宗像大神を中心に仰ぎ敬神崇祖の美風を伝統として繁栄したが、この勅祭社の願いは郡民百年来の願望であり、氏子の祈りをこめた署名簿がこのたび神社に集められた。

この署名簿は二月下旬、久保宮司が直接宮内庁に持参し関係当局に郡民多年の願いを披瀝し、この趣意達成されることを再度上申した。

便り

道振神社の建立等

謹んで昭和四十三年の新春をお寿び申し上げます。

月々の郷土の便り只々懐しく拝読致しております。

私の奉仕して居りました頃は、昭和八年―十五年迄で、あの頃は櫟本宮司の時代、交通安全祈願祭の初期の時代と申しますか、県庁の保安課の方に趣意書を配っていただくよう依頼したり、国鉄関係への神棚奉斎、赤間駅にて一時間の停車中に関東 関西旅行団体に安全祈願をしたり、其の他色々ありました。鳥栖駅構内の道振神社もその頃建立されたものです。

沖ノ島奉仕も再度でありましたが、今一度参拝致度何卒よろしく願上げます。

御誌の充実した編輯振りもさる事乍ら、諸祭事の復元には大変お骨の折れた事と拝察致します。

宗像大神の御神威弥々顕著にあらせられ、勅祭の儀の顕現も間近であろうかと拝察致し、宮司様始め、職員御一同様の御健闘をお祈り申上げております 敬白

阿蘇神社 祢宜 宮川正也

厳寒の砌、皆々様には益々御健勝の事とおよろこび申し上げます。

愚娘真紀子に三年間奨学金を恵んで頂きまして誠に有難うございました。お蔭様で三月一日に卒業の見込みでございます。

就職も内定致しまして、二月一日からK社で働いております。

毎日張切って行っておりますので私も一安心です。

主人の亡き後、苦しい時に奨学金を戴き、御恩は母子共に忘れません。長女は昨年春から赤間小学校に奉職致しました。長男が九大一年で私も一頑張りとなりました

今後共よろしく御指導の程お願い致します。寒さもあとしばらくと存じます。何卒御自愛をお祈り致します。

先ずは御礼まで

話題の新車をみる (七)

マツダファミリアの巻

自動車エンジンの輸入自由化、外国資本の日本上陸自由化に備えて、自動車業界再編成云々と云う言葉が流行になっている。事実合併又は業務提携が進められ再編成の段階に入っている。だが依然として競争は熾烈を極めている。Aメーカーが何ケ月クラス売上げトップと宣伝すると、Bメーカーは必死になって同車種に挑戦、売上げ実績一位と云う看板を奪い取ろうとする。そしてAとBの成績が引繰返りでもすると大変である。Aメーカーは新聞テレビ等に依る宣伝、特別試乗会等と種々の手を打ち、はてはマイナーチェンジ、モデルチェンジと進み値下げの時期を慎重に計画する。だがオーナーにとっては大変嬉しい事である。車の性能は飛躍的に向上し、しかも安く買う事が出来る。但し例外がある。マイナーチェンジ、モデルチェンジ、値下げ等の直前に、これを知らずして買った場合である。いきなり我が所有車は旧型車、あくせくして支払った二、三カ月分の月賦は値下げにより徒労！何となく裏切られた気分になるのは無理からぬ事である。だが敢えてこの種の不評を買ってもメーカーはこれを決行してやむを得ないと悟る場合がある。車は造れども売れぬ場合である。背に腹は替えられぬ、企業の苦しさである。

余談でお茶を濁して終ったが、今回はモデルチェンジして登場したマツダファミリアについて紹介をしたい。但し前文と関係の無い事を予じめ御承知戴き度い。この車はメカニズムに於ては昨年一月に八〇〇ccから一〇〇〇ccにパワーアップした車と大差ない。云わば新モデルはより広い車に！と云う事が第一条件のようである。角眼ヘッドライトは昨年一月のモデルに執り付けられたが、外観としてその面影を残しているのはこのライトのみである。眼新しい所を紹介すると、カーブドグラス使用、ボデイの基調はオーバルシェイプ、三角窓の除去、バンパ両端部上向き跳上げ式、パネル両端部のサイドベントとリヤウインドー部に付けた排出口、前席はメーカーオプションとして取付けられるヘットレスト、これは床屋の椅子式で上下調節可能、走行中ドライバーが片手で高さを変える事の出来る便利さがある。室内後席に前席を一杯スライドして、なお二〇センチの膝のスペースを残す余裕がある。

ステアリングについて紹介するとボールナット式ステアリングで軽くて遊びが少ない。回転半径は4・4mから4mと一層小廻りのきく車となっている。

宗像大社御用 綜合印刷
有限会社 大和印刷所
宗像郡宗像町東郷 電話 宗像局2027 有線277－1番

宗像伝説

維新の偉人徳重正雄伝 其の七十九

時は恰も明治の百年、神郡宗像にその名を残した偉大なる人物、徳重正雄の遺徳を忍びその業績を称えたい。

弘化三年宗像郡徳重村（現在の赤間）の里に生れ、幼名を三蔵といった。彼は世に神童と呼ばれる程の人物で才智にたけていた。

安政三年、九才の時、習字並びに四書の素読を修め、十一才にして旧福岡藩士族源蔵氏に随い四書五経を学ぶ。士族月形氏に就いて皇漢大部の史学及び詩文学を修め、その修学ぶりには藩の者は唯々驚嘆するばかりであった。

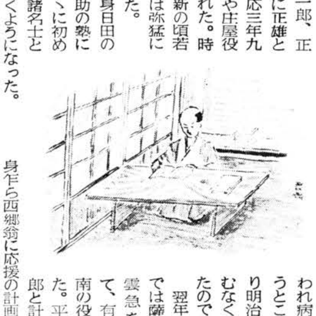
文久二年三月には元服して、赤間村徳重の若き庄屋役に命ぜられたが全三年八月依願辞職する。この間に改名すること数回、三郎平、泰二郎、正巳、最後に正雄となる。慶応三年九月またもや庄屋役を命ぜられた。時は明治維新の頃若き彼の心は弥猛に踊っていた。

彼は単身日田の広瀬孝之助の塾に入学。こゝに初めて天下の諸名士と胸襟を開くようになった。

そののち一年有余郷里に帰った彼は、五卿赤間の茶屋に滞在と聞き、時到れりとばかり歌一首に感慨を託して三条実美公に献じた。

やがて五卿が太宰府に到着、直ちに特使を以って彼に次の一首を贈られた。

如何にして筑紫の海に寄る波の千重の一重を君につくすぞ。



この間薩摩の志士西郷隆盛に会い、天下の大勢を聞いて大いに感ずるところあり、尊王開国の情いよくやみ難いものがあった。彼は遂に福岡藩を脱走して秘かに鹿児島の造士館に入塾した。こゝにいたく南州に愛され、藩費を以って衣食費を給与されていた。

或る初秋ふらりと塾を出た彼は、やがて徳重神社の境内に入った時、彼はふと心にある衝動を受けたのであった。「オヽなつかしい故郷徳重の名だ！夢にだに忘れた事のない。父母健在にましますやら」彼は懐郷の情に心迫るのをどうする事も出来ずそれから改めて徳重正雄と称したのである。

月日は去って明治三年五月福岡藩脱走の罪はゆるされ、俊才な彼は、愈々藩費を以って東京留学となる。かくて旧吉井藩の士族佐原貞一に随って経書、皇漢の歴史を研究し後外国語学校に入学独逸語を学ぶ。

明治五年には私費を以って、ついに独逸留学が許可され独逸のハイデルベルヒの経済学士レッチンゲル氏の塾に入って独逸語は勿論のこと数学、幾何、三角術、歴史、経済のあらゆる学問を修得。学問に専念すること四年間気候風土の異る外国での必死の勉強にあわれ病魔の襲うところとなり明治九年やむなく帰国したのである。

翌年我が国では薩南の風雲急を告げて、有名な西南の役が起った。平岡浩太郎と計って病身乍ら西郷翁に応援の計画中、幸か不幸か、計画が官軍に漏れて平岡は捕われ、彼は宵闇にまぎれて芦屋から船出して大阪の大三輪長兵衛の家に身を隠していた。

その時大三輪氏の発起による五十八銀行創立に於いては、その資金六万円を福岡で募集し、創立の貢献者たるを以って初代取締役に選ばれた。

しかし病気は再び悪化して、熱海、箱根等養生にあれこれと手を尽せども天は遂に彼を見離し、明治二十年三月十一日四十二才の若さでこの世を去った。

あゝ惜しむべきは、一世の俊傑彼は国家の為に尚前途幾多の為すべき身を以って福岡の病院に瞑目した。

郡下に於ける海外留学の最初の人、徳重正雄の一生こそ、華々しくも又余りにも劇的なイバラの道ではなかったろうか。

宗像大社献詠
俳句作品集（六十三）

平等寺　中野　きみ
土に生く日々好日の鍬始め

久留米　篠田太郎坊
子の入試社はみくじの花盛り

津屋崎　白石百合蔵
水仙の匂ひ偏よる工区の端

田熊　小野　淡坡
床飾る雛もお客も数を増し

田熊　小野　花居
風花をついて来客先づ炉辺に

福岡　広田　美津
献茶式こよなき思ひ春長き

大井　吉田　杏子
笹鳴きや背戸に積む雪まだ解けず

大井　安部　重郎
熾んなる遠賀河原の野焼かな

大井　木原　房子
山焼の放送流れ菜を刻む

田島　楠本　正
春いちばん土中に蛇のうごめきし

田島　山田　幸雄
銀嶺の大陽（ひ）に照りはえし許斐山

田島　末安　大孝
山肌をまだらにみせる残り雪

筑後　井上代利子
毛糸あむ手にあたゝかき春陽かな

出光佐三一問一答シリーズ　⑲

マルクスが日本に生まれていたら

とくに大きな戦争の後では、知恵ばかりが急激に発達して心は退廃してしまうのが普通なのだ。それが今日の世界の行き詰まりを来たしている原因じゃないかね。だから心の人間でなくてはならない。心の人間がつくれば、平和と福祉の社会が出来るということであって、理屈でいくら社会構造を変えてみても、なんにもならない。平和・福祉をつくろうとする人間の心が出来て、その心が知恵や技術を利用して、社会の仕組みを考えていくということだ。そしてその心は、日本の平和の三千年の歴史に示されているということだね。

17 マルクスの弁証法的唯物論について

質問　人間解放を目指すマルクス主義の理論的基礎をなしているものは、弁証法的唯物論です。それは、自然と社会に対する一つの見方ですが、その主張するところは次のようなことです。

一、自然も社会も、世界のありとあらゆる現象は、人間の心（意識）のほかに、それとは独立に、客観的に存在する物質のいろいろな運動形態である。人間の心（意識）はこの客観的に存在する物質を人間の頭脳が反映したものにほかならない。そしてこの映像は、実践によってその正しさを検証されてますます正確になる。

二、客観的に存在するこの物質、すなわち、自然と社会のありとあらゆるものは、すべて弁証法の法則にしたがってたえず変化し発展する。弁証法の法則は、あらゆるものはお互いに関連をもちながら変化発展するものであり、その原動力は内的な矛盾である、という。

この弁証法的唯物論を歴史、社会、経済に適用したものが唯物論史観あるいは史的唯物と言われるものです。

出光　君らの説明によると、マルクスは、自然の現象も社会の現象も、物質の運動形態であると言っているらしいが、自然現象はそういうことが言えるかもしれないが、社会に対してそんなことが言えるかね。社会は人間がつくっているものだぜ。人間なくして社会は成り立たない。社会の中心は人間なんだ。だから人間の心を抜きにして、いくら社会のあり方を論じたって駄目だよ。そしてその人間の心の中心は、再三言うように、平和に仲良く暮らすということだ。そこに人間の尊厳があるんだが、そういう人間の心が物質の反映によって変化していくなどということは、本末を誤った、ありうべからざることで、人間の尊厳に対する侮辱だと思うね。ことに今日のように対立闘争で行き詰まった世界の現実をみるとき、平和と福祉をうち立てる人間の尊厳に対する認識が、いかに大事なものであるか、はっきり証明されているじゃないか。

ただ人間は神・仏とは違って、獣類に似た、人間らしい矛盾性をもっている。その矛盾性から、いろいろゆがんだ社会現象も生まれてくるわけだが、それは人間が矛盾性をつつしみながら、平和に仲良く暮らすには、どうすればよいか、ということを判断して、社会の間違いやゆがんだ姿を正していけばよいんだ。それが心の尊厳をもっている人間のすることだ。人間が矛盾性をつつしむということが先であって、それをやらずに、いくら社会の仕組みや制度を変えたって、社会はよくなりはせんよ。もしマルクスのように、社会の現象は、人間の心とは独立した物質の運動形態であるというようなことを言うならば、それは人間を社会の奴隷、人間の矛盾性の奴隷になれということじゃないか。

質問　しかし、そうは言っても、人間が社会から影響をうけて、人間の考えやあり方が変わってくることもあると思いますが…

出光　影響のうけ方が問題だ。人間の矛盾性から起こる社会の矛盾に人間が引きずられてはいけない。ぼくは学生時代に、大阪の商人が人間としての矛盾性を発揮している姿をみて、黄金の奴隷たるなかれ、と言って出発したんだが、その場合のぼくは、人間の尊厳というものを自覚して、人間社会はああいう姿であってはいけないと思って、引きずられずに反発したんだ。なにか最近では、自分が悪いことをしたり、堕落したりすることを社会の責任であるかのように言う風潮があるが、人間が、自分でつくって自分で矛盾性を発揮している社会に影響をうけ、引きずられるなどということは、主客転倒しておりはしないか。そんな本末を誤るようなことをしてはいけないということなんだ。社会は人間がつくったものだから、矛盾性があるのはあたりまえだけれども、自らの矛盾性を戒めつつ、それを克服し、間違いを改善していくところに、人間の人間たる所以、すなわち人間の心のあり方があるということだ。

質問　その矛盾ということですが、店主は、社会の矛盾も結局は人間の矛盾性から生まれるように言われます。私たちも人間が矛盾性をもっていることはよくわかるのですが、社会現象における矛盾という場合、人間の矛盾性とは関係ないように思います。

農業を例にとりますと、或る農村で数十戸の農家がわずかの田地をおのおの所有して、昔ながらの旧式の農耕をやっているとします。そこにトラクターとか開墾機とか、いろいろの新しい機械が出来てきて、それを使えば非常に能率があがる。しかし従来の小規模の所有形態では、その機械を活用できない。その場合、田地の所有形態と機械の生産力との間に矛盾がある、というふうに理解できると思いますが、そういう矛盾を店主はどう考えられますか。

出光　それは変化というものであって、人間から独立した矛盾なんてものではないよ。変化はいつの時代でも、どういう社会でもあるよ。そういう変化に対して、平和に仲良く暮らすという人間の心で正しく対処していけば、そこに進歩繁栄が生まれる。反対に、人間が我欲・エゴイズムの矛盾性を発揮して対処すれば、そこに矛盾が起こって、対立闘争したり混乱したりして退歩となる。変化も人間次第で進歩ともなれば退歩ともなる。要は人間が心を正しくもって対処していくことだ。

質問　その矛盾についての考え方がマルクスと店主とでは根本的に違うようですね。マルクスは社会に矛盾があるから人間も矛盾性をもってくる、という考え方ですが、店主は人間が矛盾性をもっているから社会に矛盾が出てくると言われる。

出光　人間の矛盾性というものは、人間が生まれつきもっているもので、外部から与えられるようなものではない。社会がどのように変わろうとも、外部の環境がいかに変化しようとも、人間の矛盾性はなくなりはせんよ。なくなれば神や仏になってしまう。そういう矛盾性をもった人間が社会をつくっているから、そこに社会現象や物を通して、人間の矛盾が現われるんだ。人間が物に関係しないとすれば、物自体に矛盾などあるはずがない。人間の矛盾が先であって、社会の矛盾はその結果なんだ。それをマルクスは反対に考えるから、社会の仕組みや制度を変えれば、人間もよくなるなどという誤りをおかすんだ。

質問　そういう店主の考えでいけば、弁証法的唯物論のような、人間の意識から独立した客観的な法則は、社会に認められないわけですね。

（つづく）

経営とは何か
PFドラッカー

北メキシコでは、過去五〇年の間に教育の発達で、読み書きができるようになった。だから本、新聞、雑誌等も読める。しかし読むものは与えられていない。中南米全般にわたって本というものは非常に高いしまた書店というものはごく少数が、大都会にあるだけである。たとえばメキシコの国立大学はメキシコシティにあるが、そこにいる八万人の学生に対して本を売っている店が一軒もない。そこでアメリカから直送してもらう方が地元の書店を通じて買うよりも安いし早いということがいえる。

ところがこの安い紙とじの本の配給というものは、コカコーラの配給に非常によく似ている。店先の回転棚にのせて、一週間も売れなかったようなものは、これをとり戻して売れるものと置きかえていくというサービスが必要で、これはちょうど清涼飲料水の配給と同じような仕事になる。

これは非常にうまそうであるが、やはりいろいろな失敗もある。最初にどんな本が売れるであろうかという見当をつける際に、こういった貧乏な部落で読まれるのだから非常にセンセーショナルなものがよかろう。殺人に関する小説とか、あるいはセックスのものとか、そういうものがよかろうといって出したところが、実はこういうところの人たちは読むものがない。読む機会を与えられると非常にまじめな内容がほしいということがわかり、現在では歴史とか、数学とか、あるいは科学、といったようなものに切りかえている。メキシコのこの田舎の部落の内容を知っていれば、こういった暴力とか、あるいはセックスの面は十分に自ら体験しているので、本で読む必要がなかったわけである。

ところがこの仕事でもう一つ困難な問題としてこのペーパーバックスをメキシコで印刷し、製本するということができない。そういった設備がない。したがって全部ニューヨークでこれを製本しなければならない。また南米において輸入許可をとるということが非常にむずかしいので、それもまた大問題になってくるということである。しかしそういう問題点はあっても、現在では年間約一〇〇万部売り、その利益率は四割にも達している。

ワンマン型成長企業の欠点

また不均衡としては、企業体の頭脳がからだと均衡のとれた発育をしないために、企業活動が非常に大きくなっていながら十分の知識をもっていないということがある。これはあたかも一六才の子どもが、非常にからだは伸びているけれども、知識が幼稚だというのによく似ている。一六才の子どもの場合には、自然の力というものがはたらくから、あまり心配する必要はないが、企業体の場合には、人為的になにかこれを是正しなくてはならないということが言える。

二、三年前に、アメリカの株式市場に大暴落があったが、その原因はいまいったこの不均衡にあった。この理由はまことに簡単なもので、その一年ほど前に株式業界では、成長株というものがあるということに気がついた。これはどういう企業の株式であるかというと多くの場合は、比較的小さな企業体であり、しかも四、五年の間に売り上げ、及びその企業規模が非常な急速な成長した企業体の株式である。

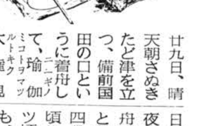
こういった企業体は、経済の成長の波に乗ってどんどん成長するという、非常に幸運な企業であったといってよい。

（つづく）

文久三年四月　吉田主水致兼

"上京道中日記"

松崎武俊



廿九日、晴天朝さぬきたど津を立つ、備前国田の口というに着舟して、瑜伽（ニニギノミコトヲマツルトキク）大権現に参詣す。

田の口よりゆが山迄三十六丁という御宮建つ、誠に見事なり、家上は桧皮葺にしてたいそうなる事、筆舌につくしがたし、しかれども国印の由聞き侍る、九ツ頃より参詣して暮六ツ頃帰舟す、道々真田織店いたって多し、色々あり、同行中にては大分買い求める。

晦日、晴天田の口を出舟して、日比の湊に着く、日和模様少々変り候に付舟を出さず、それ故日比の湊に上り、真田織などを又買う、田の口よりは少し高し、備前岡山様御領分の由、四ツ頃より雨天、日比というに舟つけ替える。その夜上日比に泊る。同所五ツ半頃出舟す。明ければ目出度く卯月朔日となる。

四月朔日、備前の上日比を五ツ半頃出舟して、同国牛満というに七ツ頃着舟す、朝は少々小雨降れども、後は降らず、日比より牛窓迄八里ありという、つき多つきたちを賀して酒など呑みて、女ら又は妹などの事をいい侍りて

〽我国も、千里隔てゝ、わだつ海も、からくれないは、大和撫子

とよめる永賀返えしに

〽ふるさとを、八百り隔てゝ、来しとも、色はかわらじ、宮のはつ菊　致兼

備州牛まどの浜に舟をとゞめて、酒など呑み侍りて、

〽あら小田を、かえす牛まと、やどりして、我が故郷を、おもいやらるゝ、

〽牛窓に、やどりとて三河水、手にすい、古き郷はおもわじ、　永賀

返し

〽都をと、おもむく今の、嬉しさも、妻子おもわぬ、時しあらめや、　致兼

〽朝夕に、なれて、よみにし、妻や子を、おもわで旅を、越えて行くとは、

と亀石氏のよまれければ、

〽うぐいすの、寝ぐらはなれぬ、我れなれど、心は同じ都にぞ行く

〽故郷を、露のおくと、おもい置き、ただ行先を、楽しみにして、

と日並氏の詠し返えしに

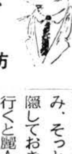
〽立ちいでて、長のみやこを、行くからに、心をさとに、残さましとや、

卯月二日、ひる九ツ頃出帆して天気になる。

（つづく）

――宗像薮庵先生百話――

南方　華やかなりし頃



宗像太郎坊

琉球の羽衣

ある夏の夜である。奥間は野良からの帰りに空を仰ぐと、めずらしく星の多い宵であった。今宵も森川の泉に映る星を見に行こうと近くまで来ると、ぷーんとえも言われぬ蘭麝の薫りが漂ってくる。はっと思って泉の方を見ると、この世のものと思われぬ美人が水浴している。ふさふさとして長い黒髪が清い泉の星とゆれ合い波打っている。美しいというより妖しい神々しさの余り声も出なかった。都から来たか、天から降ったか地から湧いたか、実に不思議でたまらず、暫し恍惚として自分の眼を疑った。ふと上を見ると、老松の枝に、絢爛目を欺くような羽衣が懸けてある。奥間はこれを怪しみ、そっと、その羽衣をとり叢に隠しておき、さりげなく泉の方へ行くと麗人は驚きあわてて、手早く羽衣をつけようと松のほとりに駈けよったが羽衣がない。かがみ込んだ麗人は顔に手を当ててさめざめと泣き出した。奥間は知らぬ顔して、なだめるように、「あなたは何処からあらわれましたか、どうして泣いていますか」、銀鈴を振るような涼しい声で「わたしは人間ではありません。天女です。この晴れわたった晩、雲の上から見降す下界の美しさ、ことにこの泉のほとりの風景に魅せられて、ほんの少しばかり水浴しようと思って降りて来たのですが、この松の枝にかけておいた羽衣が見つかりません。あれがないと天へ帰れません。どうか羽衣を探して下さい」と天女はなおも泣きくずれる。奥間はこの機会を逸してなるものかと、「天女様。ではしばらくわたしの茅屋に休んでいてくれませんか。きっと探してごらんに入れます。」と騙し、自分の家に連れて行った。奥間は誰にも知られないように羽衣を穀倉の奥深くしまいこみ、毎日、探しに出ているような恰好を見せていた。そして、月日がたつうちに、天女は奥間の子を宿し、女の子を生んだ。子供が出来てみると、天女にも母親としての人間の愛情が湧いてきて、これまで寸刻も脳裡から離れることのなかった天の故郷や、羽衣を忘れる日があるようになってきた。いつのまにか、また男の子が生れたのである。

天女が奥間の女房になってからは、農作物も豊年続きで、好運に恵まれ、その日その日を裕福に、円満に暮していた。野良から帰ると毎晩のように泡盛を飲み、自分は世界一の果報者だと思い、嬉しそうに二人の子供の頭を撫でたり抱き上げたりして「偉くなれ、偉くなるんだぞ」といって踊ったりした。或晩、天女は奥間に向って「あなたさまをそんなに幸福にさせるのはなんですの」と尋ねた。奥間は突嗟の質問にたじろぎながらも「これだ、天の美禄だ。アッハッハッハ」といいながら、泡盛の酒壺を振ってみせた。「天の美禄」天女は一瞬深い物思いに沈んで了った。

（つづく）